

**産業界関係の有識者と実務教育をテーマとした対話を実施**  
(2019年度産業界関係者と全国大学実務教育協会との意見交換会)

本協会は、産業界の有識者との意見交換会を2019年度に2回(5月16日、10月10日)開催しました。

<開催の趣旨>

産業界の関係者と本協会の関係者との間で、ビジネスパーソンや大学生の人材育成に注目して協議をする。とくに各地域の人的環境の変化を認識しつつ、時代にマッチした人材育成の在り方について提言し、大学のみならず、産業界における多くの関係者に役立つことを期待しているところである。したがって、この協議から生まれる提言は、本協会が進めている実務教育・キャリア教育事業に対して、多くの示唆を与えるとともに、産業界の人材育成にも寄与することを目指すものである。

参加いただいている有識者は、大学との連携の役割を担っておられる方や経営者の方で、次のとおりです。本協会からは会長、副会長、産学官交流推進特別委員長、ネットワーク支援事業推進特別委員長、能動的学修・大学教育改革の教員研修推進特別委員長、総務財務常任委員長等が出席しました。

(有識者名簿)

(五十音順)

氏名	所属	役職
川中 英章	株式会社EVENTOS	代表取締役
吉川 稲	株式会社吉香	会長 (全国商工会議所女性連合会・元会長)
小暮 恭一	株式会社エム・ソフト	取締役会長兼CEO
坂田 甲一	トッパン・フォームズ株式会社	代表取締役社長
佐藤 全	株式会社ヴィ・クルー	代表取締役
都丸 淳	三菱鉛筆株式会社	常勤監査役
山鼻 恵子	一般社団法人東京経営者協会	事業局長

今年度は大学側と産業界双方から大学と企業をつなぐ人材育成上の課題について事例発表を行い、意見交換しました。

<今回の意見交換の成果>

- ・産業界・大学(短期大学を含む)ともにそれぞれが、何を行っているのかを理解する努力が一層必要になっている。
- ・大学では自ら課題解決できる能力として「表現力の育成」を重視、演習の一環として実際の企業人との交流にも力を入れている。
- ・企業では受け身になりがちな新入社員の創造性を高めるため、入社後の継続的な研修が必要と考えている。そこに両者の共通な課題を見出すことが出来るのではないか。
- ・AIの現状は、予想以上に産業の基盤に浸透しており、文系・理系の区別なく重要となってきたため、大学側にもその対応が迫られている。

<意見交換会の要旨>

2019年度は、アルカディア市ヶ谷で第10回、第11回の産業界関係者と協会の意見交換会が開催されました。

5月16日に開催された第10回は、「大学と企業をつなぐ人材育成上の課題について」という本年度の統一のテーマに沿って、札幌国際大学教授の椿明美先生による事例発表が行

われました。椿教授は、『表現力を高め課題解決につなげる』というサブテーマで、短期大学部総合生活キャリア学科での教育活動について発表。同学科は、主体的に創造し、課題を見つけて解決できる実務能力の育成にポイントを置いており、プレゼンテーションの授業をはじめ、多くの科目で表現力の養成を図っていること、また考えを深めるために思考力の養成を目指し、ディスカッションを取り入れ、さらにこうした能力を課題解決につなげていくために、二年生の1年間、課題解決演習という科目を用意し、実際に企業のスタッフと交流する機会も用意していることなどを説明しました。

椿教授の「どのように学ぶかが重要」という指摘を受けて、森脇会長は、「このアプローチでいいのかという自問が、大学の教育改革の基本。人材教育システムに自信を持っていた日本の企業も、ようやく“これでいいのか?”と真剣に考え始めた。日本の人材育成システムの改革が、今、初めて開始されつつある」と締めくくりました。

10月10日に開催された第11回は、前回の第10回を受け、同じく企業側から「大学と企業をつなぐ人材育成上の課題について」というテーマのもと、株式会社EVENTOS代表取締役の川中英章氏より「わが社の経営方針とキャリアプラン」という事例が発表されました。同社は、広島県で仕出し業を主とした事業を行っており、広島県から働き方改革の実践企業に認定されています。川中氏は、「仕出し業は、受身の仕事と認識しがちで、創造性を高めるためには、入社後の継続的な研修が不可欠」と説明しました。

事例発表を受け、株式会社ヴィ・クルー社長の佐藤全氏は、「若者の問題の原因が、教育にあることは言うまでもないが、それ以前に家庭が問題」と指摘。また山梨県立大学理事長・学長の清水一彦氏は、「社員初期理念理解コースのような教育は、大学と企業が協定を結んで、大学が実施するのが好ましい」と指摘しました。

意見交換の最後には、今回特別参加としてお招きした、株式会社モフィリア代表取締役の天貝佐登史氏からご意見をいただきました。天貝氏は、大学・大学院で人工知能(AI)を専攻し、ソニーに入社し、AIBO(アイボ)やQRIO(キュリオ)などのロボットの開発に携わり、2010年に生体認証の一種である静脈認証技術で起業されています。天貝氏からは、AIは皆さんが思っている以上に産業の基盤に深く浸透しつつあり、現在AIに関する知識は、文系・理系の境なく、大変重要となっている。とのご意見がありました。その他にも生体認証の現状や今後、ソニー独特の人材育成法など興味深いお話をいただき、意見交換は終了しました。